

## 『火垂るの墓』を読んで

弘前大学教育学部附属中学校

三浦夏帆

戦争は魂すら不幸にする。死んでなおも後悔と無念の思いのみを残し、魂は救済されない。ならば、戦争とは何なのか。私たちの命は、虫のようにはかないものなのに、どうして人間同士の殺し合いで命を無駄にしてしまうのか。どうすれば、

人類は戦争から卒業できるのか。私の戦争に対する疑問は無限に存在した。そんな私の心を動かしたのがこの本だった。表紙には、一人の少女が立っていた。この少女が「戦争」の本当の意味をさがす物語だと思い、この本を手に取った。

。

身なのか」と。

私は、戦争というと、人間同士の殺し合いで、多くの命を奪い、人類が滅亡していく、とても恐しいものだと認識して生きてきた。あの時代を生き抜くのに、人々は自分のことだけ精一杯だから、他人のことをとても考えてあげられなくなるのだ。それは人のせいではなく、戦争そのものが皆の心を意地悪にする。戦争さえなければ、皆心優しい人間なのに。

それに、よく考えてみると、西宮の小母さんが、清太を叱るのも当たり前のことではないだろうか。小母さんが口に出す言葉は一見して残酷だが、もつともなことを話している。世話になつていてるのに、二人は「ありがとう」も言わずにいた。しかし、働いてあげるどころか、感謝の気持ちさえも伝えず、ただ家にこもつていた。二人は母を無くしかわいてしまう。戦争が無くなつた今でも、彼らの魂は今も問い続

そうだが、他人の気持ちをもつと考へるべきだと感じた。世界は一人で住んでいるのではなく、人々はお互いに助け合い、支えあって生きていくからこそ、この世を生き抜くことができるのだ。あの時、小母さんが口にした一つ一つの言葉が、私の心に突き刺さつていつた。

本から読み取れる、清太の心情は、意地悪な小母さんを責める気持ちに悩み後悔しているのではないかと感じる。この問いは、

「なぜ、節子は死ななければいけなかつたのか?」という、解けない問いかけを繰り返しているのではないかと感じた。この問いは、

人々の心から良心を奪つた。戦争を恨みたい。しかし、戦争で散つた人々の意を無下にすることはできない。このジレンマを残された者たちは抱えていくことになるのだ。

この本を読んで私は、戦争という極限状態の中で、火垂るの墓に出てくる登場人物たちは、心の余裕をもつことができなかつたことに心の奥底が響いた。戦争と戦う苦しさが身に染みて感じられた。この本は、兄妹が戦争中にでもたくましく生きる話を物語ついているだけではなく、戦争の苦しさや、その時代に生きる人々の気持ちを深く描いているのではない。かと感じた。現在、私たちが生きる世界において戦争を無くすることは不可能なのか。それを考へることが我々人類にとって大切なのではないだろうか。そんな今だからこそ、私たちは、火垂るの墓の時代に生きて死んでいった人々に想いをよせ、今やるべきことは一体何なのか考へていくべきだと強く感じた。